

令和 6 年 5 月 28 日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00432

研究課題名(和文) ブラジルのマイノリティ文学における複合性：交差する人種・ジェンダー・クラス

研究課題名(英文) Cross-sectional Study of Brazilian Minority Literature: Race, Gender and Class

研究代表者

武田 千香 (TAKEDA, Chika)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授

研究者番号：20345317

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、ブラジルの黒人文学、女性文学、貧困者による文学を横断的に研究し、これらが相互に密接かつ複合的に絡み合っていることを明らかにした。またこれまで長い間の抑圧と沈黙から解放され、主体的に語り始めたマイノリティは、従来の西洋偏重の文学では語り得ぬものを表現するために独特な視点や手法や物語を生み出しており、それが従来のブラジル文学に新しい視点や世界観をもたらしつつあること、そしてそれがブラジル文学の多様化につながる可能性も示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ブラジルのマイノリティ文学において人種・ジェンダー・クラスが密接に交錯する様相を、そのカテゴリーすべてにおいて三重苦を被っている姿が描かれる黒人女性作家の文学や、ラップを取り入れる貧困者による文学の研究を通して、論文にまとめ、具体的に示すことができた。またこれらの三要素が絡む文学作品を4冊翻訳出版し、それに関連する催しも執り行い、社会に発信できたことにも意義があった。

研究成果の概要(英文)：This study that conducted a cross-sectional study of Brazilian black literature, women's literature, and literature written by the poor demonstrated that they are closely and complexly intertwined with each other. It also showed that minorities, who have been freed from the long period of oppression and silence and have begun to speak out independently, are creating in their literature unique perspectives, techniques, and narratives to express what conventional Western-oriented literature cannot. Their literature has the potential to contribute to diversify Brazilian literature, by bringing new perspectives and worldviews.

研究分野：ブラジル文学・文化

キーワード：ブラジル文学 ラテンアメリカ文学 マイノリティ文学 黒人文学 女性文学

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

ブラジルは、人口の約0.2%の先住民を除けば、99.8%が移民(強制を含む)またはその子孫で構成される多民族国家である。だが、それにも拘わらず、文学は基本的に白人男性によって書かれてきた。数的には白人が過半数を割っている現代においても(白人44.2%、黒人・混血人54.9%、IBGE統計2016年)その傾向は変わらない。ダウカスタネの研究(2008)によれば、1990年~2004年の15年間に主要な3出版社から刊行された作品中、白人作家が93.9%、男性作家は72.7%で、ジェンダー・人種ともに偏っている。また登場人物ではさらに顕著で、主人公は約84.5%が白人で黒人は5.8%、視点が確保される語り手になると白人が86.9%、黒人はわずか2.7%(黒人女性に至っては0.6%)と、著しい偏りがみられる。

それでも1970年代末に起こった社会運動を契機としてマイノリティは、自分たちを主体として文学を作り始め、現代ではフェミニズム文学、インディオ文学、アフロ・ブラジル文学、LGBT文学などが存在し、それぞれに関する研究も行われている。しかしブラジルの社会は、人種と社会的格差が密接に連動しており、マイノリティは人種・ジェンダー・クラスの属性の複数において社会的弱者である場合が多い。このためブラジルのマイノリティ文学の研究には、属性をまたぐ横断的かつ総合的な視点を持つことが必要である。

* Regina Dalcastagnè – “Entre silêncios e estereótipos: relações raciais na literatura brasileira contemporânea”. Estudos de Literatura Brasileira Contemporânea, n.º 31. Brasília, janeiro-junho de 2008, pp. 87-110 [ARTIGO_SilencioEstereotiposRelacoes.pdf \(unb.br\)](#)

2. 研究の目的

本研究は、ブラジルの黒人文学、女性文学、貧困者による文学を横断的に研究することにより、それらがいかに相互に複合的に絡み合っているかを分析し、ブラジルのマイノリティ文学の特異なあり方を示すことを目的としている。

また長い間の抑圧と沈黙から解放され、主体的に語り始めたマイノリティは、従来の西洋偏重の文学では語り得ぬものを表現するために独特な視点や手法や物語世界を生み出している。マイノリティによる文学が従来のブラジル文学にどのような新しい視点や世界観をもたらし、ブラジル文学の多様化に貢献しているかをあぶりだす。

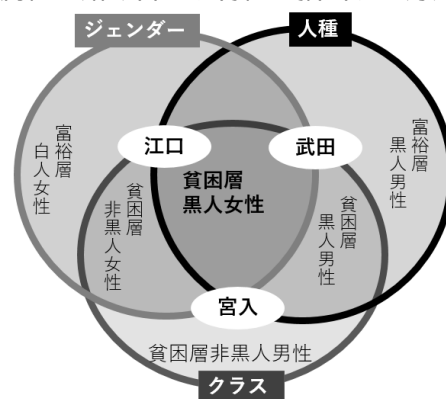
3. 研究の方法

ブラジルのマイノリティ文学の中でも、人種・ジェンダー・クラスの属性によって分類される黒人文学、女性文学、貧困者による文学を主たる対象とし、それぞれのカテゴリーの代表的な文学作品を研究代表者の武田千香、研究分担者の江口佳子、研究協力者の宮入亮が分析し、その結果を持ち寄り、ブラジルのマイノリティ文学における属性の絡み合いや特性を抽出する方法をとった。対象とした作品は以下のとおりである。

- (1) 黒人文学：『色の欠陥』(アナ・マリア・ゴンサウイス)、『皮膚の内側』(テノーリオ)、『曲がった鋤』(ヴィエイラ・ジュニオール)の分析のほか、現在ではブラジル現代文学を代表する作家の一人でもある女性黒人作家コンセイサオン・エヴァリストの文学について、その作風の「エスクレヴィヴェンシア」と代表作『ボンシア・ヴィヴェンシオ』について分析を行った。

- (2) 女性文学：ブラジルの女性文学を代表する作家リジア・ファグンジュス・テーリスの『三人の女たち』とマリレーニ・フェリント(1957-)の小説『チジュコパーポの女たち』について分析を行った。

- (3) 貧困者の文学：「貧困者の文学」の代表であるフェヘスの『サンパウロにシロはいない』と貧民街出身の助成作家カロリーナ・マリア・ジ・ジェズスの作品を対象に分析を行った。また黒人文学については、奴隷や黒人についての描写や記述のあるカストロ・アウヴィスの詩や



ジョルジ・アマードの小説、ジルベルト・フレイレの言説、貧困者の文学については貧困者を扱ったジョアン・カブラウ・ジ・メロ・ネトの詩など白人作家や研究者の作品を比較参照した。

4. 研究成果

(1) ブラジルにおけるマイノリティ文学研究の推進

研究成果の概要

日本におけるブラジル文学研究はごくわずかな研究者によってしか行われておらず、マイノリティ文学の研究に至ってはこれまでなされてこなかった。こうした状況で、本計画では、その研究基盤を築くべく、3名のブラジル文学研究者がそれぞれの強みを生かしながら、この3年間ブラジルにおけるマイノリティ文学研究を推進した。

研究代表者の武田千香は、ブラジルにおけるアフロブラジル文学の歴史と近年の動向をまとめたほか、活躍が目覚ましいアフロブラジル作家のコンセイサオン・エヴァリスト、イタマール・ヴィエイラ・ジュニオール、アナ・マリア・ゴンサウヴィス、ジェフェルソン・テノーリオの文学を対象に、アフロブラジル文学の特徴や試み、メッセージ性を分析した。研究分担者の江口佳子は、ブラジル文学を代表する女性作家のリジア・ファグンジス・テリスとアフリカ系女性作家マリレーニ・フェリントの小説を取り上げ、1970年代以降のブラジル女性作家が問題提起したブラジル社会の男性優位の伝統的価値観からの脱却(特にジェンダーによる差異・差別による社会の支配的言説からの脱却)を分析した。研究協力者の宮入亮は、貧困者の文学の代表としてフェヘスの作品を取り上げ、ラップを応用した文学的手法などその可能性のほか問題点を分析した。

このほか、移民文学については武田が日系人作家オスカー・ナカザトの作品を取り上げ翻訳し、また初年度の研究協力者佐藤椋がブラジルのゲイ文学の動向をまとめ、ジョアン・シルヴェリオ・トレヴィサンの作品を分析した。

これらの成果は論文や学会等の報告でされた。具体的な成果は「5. 主な発表論文等」を参照されたい。

人種・ジェンダー・クラスの複合性

本研究では、ブラジルのマイノリティ文学において、とくにアフロブラジル文学の作品で人種・ジェンダー・クラスの属性が密接に絡み合っていることが確認された。この背景には、かつて奴隷制が廃止された際、解放されたアフリカ系黒人の社会統合が果たされず、周縁化されてしまったことがある。この結果、ブラジルでは社会的格差と人種は連動することとなり、社会の底辺にはアフリカ系の人が多い。またブラジルでは家父長制度の伝統が今も残るため、黒人女性はさらに低い立場に置かれている。

アフロブラジル作家の作品ではその多くに奴隷制度の禍根が書き込まれている。とくに黒人女性作家の文学には人種・ジェンダー・クラスすべてにおいて三重苦を被っている姿が描かれる。エヴァリストは、この経験を「エスクレヴィヴェンシア」という独自の著述スタイルに昇華させ、これまで白人男性中心であったブラジル文学に対し挑戦的に変革を起こそうとしている。

貧困者の文学においても複合性は顕著で、フェヘスの文学作品やハシオナイス MC's のラップでは人種差別や貧困への言及が頻繁にみられる。そしてここでも黒人女性作家の作品の場合、ジェンダーが加わった三重苦に苛む状況が記されている。たとえば黒人女性作家カロリーナ・マリア・ジ・ジェズスの貧民窟ファヴェーラでの生活経験を綴った日記では貧困と差別の実態が描かれている。このようにアフロブラジル文学と貧困者の文学は密接に関わっている。

なお女性の間でも人種的な格差があるため、エヴァリストが、従来のフェミニズムは白人女性のもので、黒人女性が求める者とは全く異なると述べているのは興味深い。

マイノリティ文学の可能性

最近ではアフロブラジル作家の活躍が目覚ましく、この3年は連続してブラジルの代表的な

文学賞であるジャプチ文学賞をアフロブラジル作家が受賞している〔20年 イタマール・ヴィエイラ・ジュニオール、『曲がった鋤』、21年 ジェフェルソン・テノーリオ『皮膚の内側』(以上2作は長編小説部門)、22年 エリアーナ・アウヴィス・クルス『ドレス』(短編小説部門)〕。アフロブラジル作家は、脱植地的な視点、歴史的体験としての奴隷制の記憶、アフリカ伝来の口頭伝承性や象徴体系などの文学的手法、アフロブラジル宗教に基づく世界観など、アフリカ伝来のさまざまな文化的遺産を文学に取り入れ、従来は白人男性作家が中心だったヨーロッパ中心主義のブラジル文学に新風を吹き込んでいる。

貧困者の文学においては、都市郊外の生活の暴力や貧困というテーマがラップから取り入れられ、彼らの実体験と相まった形で貧困者としての主体的な語りが実現されている。フェエスの文学作品や1997年のハシオナイス MC's のアルバム『地獄に生き延びる』などは共通した辛辣で挑発的な言葉遣いによって都市における暴力と貧困を告発している。

女性文学においては、処女性・出産・中絶といった身体的性差と、肌の色や貧困に起因する精神的・肉体的暴力や身体の商品化といった身体表象を提示し、男性中心主義の社会における女性の従属化と社会的周縁化構造を問題提起している。

マイノリティ文学をめぐる問題

従来のブラジル文学は、白人(とりわけ男性)の視点から書かれていたため、長年にわたり黒人や貧困者は描かれる客体としてしか描かれてこなかった。変化がみられたのはマイノリティが権利を主張し始めた1970年代から80年代で、彼らは徐々に当事者として主体的な語りを獲得していった。「黒人・女性・貧困者についての文学」から「黒人・女性・貧困者による文学」への移行である。ただ黒人による文学では、アフロブラジル作家の全員が必ずしも人種・ジェンダー・クラスにおける社会問題に意識的ではないため、アフリカにルーツを持つ作家の文学すべてを特定の名称で括ることに疑問視する人もいる。また命名するとしても、「黒人文学(Literatura negra)」、「アフロブラジル文学(Literatura afro-brasileira)」、「ブラジル黒人文学(literatura negro-brasileira)」といった多様な名称があり、統一的な見解はない。

貧困者の文学については別の問題もある。貧困が後天的に課される主に経済面における条件で、改善を求められる問題であるため、貧困者たち自身がそれを肯定的な価値観に変換しづらく、また改善後は貧困者とはいえなくなってしまう。ここが女性や黒人とは異なる点で、貧困はアイデンティティに結びつきにくく、「貧困者の文学」というカテゴリー自体も成立し難い。

また本研究で扱った移民文学作品(ナカザト)とゲイ文学作品(トレヴィサン)の場合、ナカザトは日系人への差別を、トレヴィザンはゲイを巡る問題をテーマに取り上げている。これらの作家の文学には、アフロブラジル文学や貧困者の文学とは異なり、人種・ジェンダー・クラスの複合性が顕著に現われているとはいえない。

(2) 国内外における位置づけとインパクト

本研究においては以下のとおり、多くのブラジルのマイノリティ文学作品を翻訳して刊行することができた。まったく知られていなかったこの分野の作品を日本社会に紹介できたことは本研究の重要な成果である。

ブラジルのマイノリティ文学作品の翻訳出版と作家による講演等の実施

本研究期間中に以下の4冊の文学作品を翻訳出版した。

- ・ [移民文学] オスカル・ナカザト(2022)『ニホンジン』、武田千香訳、水声社、227頁。
- ・ [女性文学] リジア・ファグンジス・テーリス(2022)『三人の女』、江口佳子訳、水声社、284頁。

- ・ [黒人・先住民文学]イタマール・ヴィエイラ・ジュニオール(2023)『曲がった鋤』、武田千香・江口佳子共訳、水声社、322頁。
- ・ [女性文学]クラリッセ・リスベクトル(2024)『ソフィの災難』、福嶋伸洋・武田千香共訳、河出書房新社(2024年6月刊行予定)。

このうちオスカル・ナカザトとイタマール・ヴィエイラ・ジュニオールの2人については、来日時に公開講演会を開催したほか、来日に合わせて行われたトークショーなどさまざまなイベントに研究代表者の武田が作家とともに参加した。また雑誌などにも原稿を寄せ、ブラジルのマイノリティ文学について一般社会においても広く知ってもらう機会を作った。関連するイベントや記事については、本稿〔その他〕を参照されたい。

アフロブラジル文学の公開セミナーの開講

また最終年度には、アフロブラジル文学研究の第一人者であるエンヒッキ・マルキス・サミン氏(リオデジャネイロ州立大学准教授)を招聘し、公開セミナーを開講した。以下4つの講義のほか、講義の内容をふまえて文学作品の分析をワークショップで行った。

- ・ 「ある人種による文学の起源」
- ・ 「“ブラジル研究者ら “から黒人批評へ—文学作品の名称と定義づけ—」
- ・ 「新しいキロンボによる著作 集団的プロジェクトとしての黒人作家による文学」
- ・ 「ブラジルの黒人女性作家たち 伝統の歴史」

本セミナーには学外からも一般人や研究者の参加があり、アフロブラジル文学を日本社会でも知ってもらう機会を創出することができた。またこれらの講義を日本語に翻訳し、講義録『アフロ・ブラジル文学 ブラジル黒人文学と批評の伝統』を刊行した。

ブラジルにおけるインパクト

セミナーの開講はブラジルの総合文化雑誌『ピアウイ(Piauí)』^{*}で、ときにブラジルでも理解が得られないアフロブラジル文学に対し日本で関心がもたれたことが伝えられた。現に2024年5月、それを読みサミン教授のもとを訪れた人にリオデジャネイロ州立大学で会った。

*SAMYN, Henrique Marques, "O Japão quer saber da literatura negra brasileira: Um professor universitário carioca conta como foi acolhido com mais interesse no meio acadêmico de Tóquio do que costuma ser no do seu país". Revista *Piauí*, 25 de outubro, 2023. <https://piaui.folha.uol.com.br/o-japao-quer-saber-da-literatura-negra-brasileira/>

(3) 今後の展望

本研究のマイノリティ文学全体の視点からの研究を通して、カテゴリーごとの課題が明らかになってきた。今後は、それぞれの文学について深めていくことになる。

この間の研究からは、アフロブラジル作家による文学作品には、歴史の批判的再認識 紐帯としてのアフロブラジル宗教 独自の文学的世界の創出といった特徴がみられ、これらには共通分母として「アフリカ」というトポスが認められ、今後はアフロブラジル文学という言語的実践の中で「アフリカ」というトポスを切り口にした研究を推進する。

ブラジルはいまだ貧困を問題として抱えている。「貧困者の文学」については、多くの場合は望まぬ形で貧困者と見なされながら生きる人がどのように語られ、また語るかを文学作品を通して読み解くことで現代における貧困の様相が明らかになる。また都市部のみならず郊外を文化の発信地とする試みにおける貧困者の積極的な主体性に焦点を当てることも可能であろう。

女性文学については、家父長制に縛られた女性の身体が象徴的に描かれていた1970年代から、80年代にはもはや個々人の弱者としてではなく、「街中」や「道」等公的な空間に置かれて社会全体の問題として位置づけられるようになった。グローバル化時代における女性の「語りの場所」を検証し、ジェンダーの問題や、支配的言説への抵抗を明らかにしたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 武田 千香	4. 巻 25
2. 論文標題 語りはじめたアフロ・ブラジル作家たち 原点を見つめなおして	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 総合文化研究	6. 最初と最後の頁 19～44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15026/117036	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 江口佳子	4. 巻 25
2. 論文標題 声なき北東部の女性たちが織り成す 道 マリレーニ・フェリント『チジュコパーボの女たち』	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Encontros Lusofonos	6. 最初と最後の頁 1-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 武田千香	4. 巻 27
2. 論文標題 コンセイサオン・エヴァリストの文学 「エスクレヴィヴェンシア」と『ボンシア・ヴィセンシオ』	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 総合文化研究	6. 最初と最後の頁 56-77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15026/0002000257	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 4件）

1. 発表者名 TAKEDA, Chika
2. 発表標題 A traducao: ponte entre culturas: Machado de Assis, Memorias Postumas de Bras Cubas
3. 学会等名 III Congresso da ABRE- online, Associacao de Brazilianistas na Europa（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 TAKEDA, Chika
2. 発表標題 A traducao da literatura brasileira para o japones
3. 学会等名 I Webinario de Professores de PLE no Japao e exterior (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 宮入亮
2. 発表標題 フェヘスの短編集における『貧者の文学』
3. 学会等名 日本ラテンアメリカ学会AJEL東日本研究部会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 江口佳子
2. 発表標題 リジア・ファグンジス・テーリス『三人の女たち』における多様な声
3. 学会等名 京都外国語大学 ブラジル独立 200 周年記念シンポジウム「社会の鏡としてのブラジル文学」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 菊池豪人
2. 発表標題 ムラ トとしてのマリオ・ジ・アンドラージ
3. 学会等名 日本ポルトガル・ブラジル学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 江口佳子
2. 発表標題 社会の鏡としてのブラジル文学
3. 学会等名 京都外国語大学ブラジル独立200周年記念シンポジウム
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 江口佳子
2. 発表標題 社会的公正に立ち向かう女性の身体 マリレーニ・フェリント『チジュコパーポの女たち』
3. 学会等名 2023年度国際行動学会第19回 年次大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 TAKEDA, Chika
2. 発表標題 Microcosmo
3. 学会等名 I Colóquio internacional Marco Lucchesi, 15 e 16 de Janeiro de 2024, Roma-Embaixada do Bras (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 EGUCHI, Yoshiko
2. 発表標題 As vozes das mulheres alem das fronteiras culturais: sobre a traducao de As meninas, de Lygia Fagundes Telles, para a lingua japonesa
3. 学会等名 IX Colloque international de litterature bresilienne contemporaine : en temps de reconstructio (国際学会)
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 小池洋一・子安昭子・田村梨花編（武田千香共著）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 現代企画社	5. 総ページ数 22
3. 書名 「人間の本性とブラジルの人と社会を描く マシャード・ジ・アシス」 in 『ブラジルの社会思想 - 人間性と共生の知を求めて』	

1. 著者名 オスカル・ナカザト著・武田千香訳	4. 発行年 2022年
2. 出版社 水声社（ブラジル現代文学コレクション）	5. 総ページ数 227
3. 書名 ニホンジン	

1. 著者名 リジア・ファグンジス・テーリス著・江口佳子訳	4. 発行年 2022年
2. 出版社 水声社（ブラジル現代文学コレクション）	5. 総ページ数 284
3. 書名 三人の女たち	

1. 著者名 イタマル・ヴィエイラ・ジュニオール著・武田千香・江口佳子訳	4. 発行年 2023年
2. 出版社 水声社（ブラジル現代文学コレクション）	5. 総ページ数 322
3. 書名 曲がった鋤	

1. 著者名 5.エンヒッキ・マルキス・サミン著 / 武田千香・江口佳子訳	4. 発行年 2024年
2. 出版社 東京外国語大学	5. 総ページ数 64
3. 書名 東京外国語大学2023年度 夏季集中公開セミナー「アフロ・ブラジル文学」 ブラジル黒人文学と批評の伝統	

1. 著者名 クラリッセ・リスベクトル著 / 福嶋伸洋・武田千香訳	4. 発行年 2024年
2. 出版社 河出書房新社	5. 総ページ数 -
3. 書名 ソフィアの災難	

〔産業財産権〕

〔その他〕

江口佳子「ブラジル文学における女性作家の確立とグローバル化」『パンデミックとフェミニズム 新・フェミニズム批評の会創立30周年記念論集』（翰林書房）p.108-113、2022年。/ 武田千香（2021）「色の欠陥」を乗り越えて ブラジル、人種混濁の国で、『Pieria』、2021年春号、東京外国語大学出版会&附属図書館、pp.20-21 / 武田千香（2022）日本人」と「ニホンジン」 翻訳という対話」、コメット通信29号 特集「ブラジル現代文学の輝き」、水声社、pp. 1-2。/ 武田千香（2022）「ブラジル文学 底知れぬ多様性 独立200年「ニホンジン」など5作邦訳、夕刊読売新聞、2022年7月23日、p. 5。/ 武田千香（2022）「ブラジル文学の簡易版見取り図 日本語で読める作品を中心に」、コメット通信21号 特集「ブラジル現代文学の輝き」、水声社、pp. 3-7。
《イベント》武田千香（2023）イタマル・ヴィエイラ・ジュニオールさん講演と朗読「過去を耕す：脱植民地文学の視点」（Authors Alive! ~作家に会おう~）での対談・朗読、ブラジル大使館主催、早稲田大学国際文学館、2023年4月12日。/ 武田千香（2023）「曲がった鋤」刊行記念 イタマル・ヴィエイラ・ジュニオールさんと翻訳者の武田千香さんトークイベント、ブラジル大使館主催、代官山 鷺屋シェアラウンジ、2023年4月10日 / 武田千香（2022）「地球の音楽：ブラジル音楽の胎動」、TUFFSオープンアカデミー夏期間教養講座「地球の音楽(1)」、2022年8月25日。/ 武田千香（2022）「ブラジル文学の秘められた大傑作、『プラス・クーバスの死後の回想』の魅力 訳者・武田千香さんを迎えて」、紀伊國屋書店Kinoppy&光文社古典新訳文庫読書会、聞き手：駒井稔、2022年7月29日。/ 武田千香（2022）「ブラジル文学の魅力とアイデンティティの多様性」、『ニホンジン』刊行記念、オスカル・ナカザトさんトークイベント、聞き手：武田千香、アンジェロ・イシ、代官山 鷺屋書店、2022年7月1日。/ 武田千香（2022）オスカル・ナカザト×武田千香×福嶋伸洋『ニホンジン』（水声社）刊行記念、本屋B&B、2022年6月29日。

6. 研究組織			
	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	江口 佳子 (EGUCHI Yoshiko) (40766507)	常葉大学・外国語学部・准教授 (33801)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	宮入亮 (MIYAIRI Ryo)	上智大学・外国語学部・助教 (32621)	
研究協力者	菊地豪人 (KIKUCHI Taketo)		
研究協力者	佐藤 椋 (SATO Ryo)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関